



今年の秋のオープンキャンパスで熱演する山本秀人子ども発達学部長

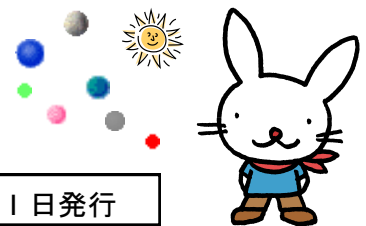
この号の主な内容

学校教育専修での学びがはじまりました	1
子どもたちや生徒たちと本気でぶつかった実習体験	2
子ども発達学部の専門演習ゼミを紹介します / 自炊教室	3
サークル、課外活動での私たちの取り組みです / 教職員紹介	4



— 日本福祉大学 子ども発達学部ニュースレター —

第11号 2013年12月1日発行



学校教育専修での学びがはじまりました

【主な変更点】

2013年度より、初等教育専修を学校教育専修に改め、学生定員を50名から60名に増員しました。これにともない、取得できる免許状は、小学校1種・幼稚園1種から小学校1種・中学校(社会)1種に変更しました。特別支援学校の免許は、発達障害学副専修のカリキュラムを履修することによって取得できます。ただし、学校教育専修の全員が発達障害学副専修のカリキュラムを履修することはできず、20名までとなります。



	2012年度入学生まで	2013年度入学生から
専修名称	初等教育専修	学校教育専修
学生定員	50名	60名
取得できる免許	小学校1種、幼稚園1種 特別支援学校1種(※1) (※1)希望者全員、他学科科目履修	小学校1種、中学校1種 特別支援学校1種(※2) (※2)20名、発達障害学副専修の履修 (※2)時間割の関係上、三免許の同時取得については保障できません。

学生定員を増やし、中学校教員養成課程を増設したので、カリキュラムを充実させ、学校教育専修を担当する専任教員も増やしました。とくに小中学校での教師経験の豊かな先生たちに来ていただいたので、より実践的な指導力を育てることができるようになりました。また教職課程センターともタイアップして、採用試験対策にもいっそう力を入れる体制を整えました。これからの学生たちのそだちを大いに期待したいと思います。

【改組(マイナーチェンジ)の理由】

2008年に子ども発達学科初等教育専修として出発した時から、福祉に強い小学校教員を送り出すことを専修のミッションとし、福祉系科目の履修や障害児・者のボランティア活動を奨励してきました。また、実践的な指導力を身につけるために、美浜町の全小中学校に協力いただいてインターンシップ(学校体験)を行ったり、知多半島内の小学校や特別支援学校で学校ボランティアにも取り組んできました。学校、地域、施設での初等専修の学生の評判は上々で、福祉に強い中学校教員養成への期待が高まっています。そこで、こうした期待に応えようと、マイナーチェンジしました。



子どもたちや生徒たちと本気でぶつかった実習体験

楽しい雰囲気の中の施設実習

子ども発達学科保育専修3年 馬場 慧(ばんばけい)
愛知県・東山工業高校出身

今回は愛知県新城市にある、八楽児童寮という県下唯一の小舎制の児童養護施設で実習を行いました。子どもたちは実習生慣れているのか、とても人懐っこい印象を受けました。また、職員の方々も気さくに話しかけてくださり、とても楽しい雰囲気の中で実習を受けることが出来ました。

実習では大学での座学では学べない、子どもとのやり取りや実際に問題に直面したときどう考えるかなど学ぶことが出来ました。気持ちが激昂してしまい、落ち着けなくなってしまった子どもに対する働きかけの方法も学びました。子どもは一つ、あるいは複数の不安、不満があるとそれを態度に、それも不適切な形であらわしてしまうことが多々あります。そんな時どうするか。まずは様子を観察し、待つことです。そしてそこで考えるのが子どもが何に対して怒っているのか、何が不安で落ち着けなくなっているのか、ということです。原因が解っているのなら「〇〇があるから不安で仕方ないんだよね。」「〇〇くんは××されたのが嫌だったんだよね。」などと子どものことを考えて理解していることを示せば子どもも落ち着きを取り戻すことが出来るということ学びました。もちろんそれだけでは難しい場合もありますが、子どものことを理解しようとする姿勢が大切なのです。

他にも多くのことを学びましたが、養育者に必要なものは子どもの気持ちに共感してそれを解消していくことを一番印象強く学んだように感じます。このことは保育者にも通ずることであり、将来子どもと関わる道を選ぶ者にはとても大切なスキルです。

子どもの気持ちを切り替える声かけを心がけていたつもりなのに、大人の一方的な都合で声かけをしてしまうと、子どもも自分のやりたいことを優先してしまいます。そういった一方的な声かけではなく、子どもに先の見通しを持たせるような声かけ、子どもが進んでやれるような前向きな声かけが必要だと感じます。しかしながら、年齢が低くなるにつれて子どもは自分の意にそぐわない時、どうしても目先の良い結果にとらわれてしまいがちです。そういったときにどういった声かけをするべきか保育者を目指すものとしての課題の一つとしてあげられます。



地域とのふれあい



【写真は浅野さん】

私が教育実習で学んだこと

心理臨床学科4年 浅野 基(あさのもとき)
長野県・松本筑摩高校出身

私は5月27日から3週間、美浜町立河和中学校にて教育実習をさせていただきました。教科は社会科で、2年生のクラスに入らせていただくことになりました。

生徒たちは歓迎ムードで私を迎え入れてくれたので、クラスにすぐに馴染むことが出来ました。35人の生徒たちと、3週間に関わることでできる時間は限られていたので、とにかく積極的に生徒たちと接しようと思いました。そのなかで、うまくいかず落ち込むこともありましたが、中学校の先生たちや大学の友人たちのアドバイスに助けられました。生徒理解というものがどれだけ難しいかを実感するとともに、生徒との信頼関係を築けたと感じた時の嬉しさを知ることが出来ました。

研究授業は歴史分野で実施することになりました。空き時間や放課後に教材研究を重ねて、何度も指導案を書き直しました。実習に臨むにあたって、校長先生から「教師にとっては教ある授業の一つかもしれないが、生徒にとっては一回きり」と授業に対する心構えを教わりました。

授業以外のこともそうですが、全力でやらなければ生徒たちには伝わりませんし、失礼にあたります。全力でやりきったといえる実習の最終日、担当の先生がクラスで送別会を開いてくれました。みんなで歌を歌い、メッセージを書いたアルバムを貰いました。私も生徒たち一人一人に手紙を準備していましたが、予想外のプレゼントに感動しました。

今回の実習は、学ぶことが多く充実したものとなりました。

10月27日(日)に行われた「農を通して、『食』について考えてみよう!」をテーマとした地域の親子参加型農業体験イベントに、ゼミをあげて協力しました。(東内ゼミ)

子ども発達学部の専門演習ゼミを紹介します

三橋広夫ゼミの紹介をします。

子ども発達学科初等教育専修3年 伊達由貴(だてゆき)
鹿児島県・種子島高校出身

ゼミ生は5名と少ないですが、毎回楽しくゼミ活動を行っています。ゼミの主な活動は、網野善彦『日本社会の歴史』(上・中・下、岩波新書)などの歴史に関する文献を読み、要約したり、疑問点を話し合っています。歴史に関する興味・関心がわき、歴史が苦手なゼミ生であってもあっと言う間に時間が経っていると思わせるほど、魅力的な空間になっています。

今後は文献を読む以外に、小学校や高校へ授業を参観しに行ったり、日本の他大学の学生や韓国の大学生との交流で韓国へ研修に行ったりと、多くの経験をするのできるゼミ活動を行う予定です。ゼミで物事を疑う視点で追究することを知り、学ぶ楽しさを伝えることができるようになることで、さらに学びへとつながると考えます。



亀谷和史ゼミです。

子ども発達学科保育専修4年 神野瑛梨(じんのえり)
クラーク記念国際高校出身

亀谷ゼミでは、まず「保育の専門性」について理解を深めました。『学びの物語の保育実践』(大宮勇雄)を読み、理解を深めていだけでなく、議題を挙げ、それについて討論し、自分とは違う意見や考えを知ることで、より一層学びを深めることができました。また、保育の企業参入、教師の暴言についてディベートを行いました。たくさんの意見を聞いたことで、自分の認識の甘さを知り、より保育について深く学んでいべきだと改めて考えさせられる機会になりました。

そして、グループに分かれて、夜間保育、子育て支援センターに見学にも行きました。実際の現場を見ることで、今、どのような支援・保育が必要とされているのか、これから保育者になる私たちに何ができるのかを考えさせられる活動になりました。このゼミを通して、これまで講義で学んできたことを、今まで以上に深めることができ、これからどのような保育者になりたいのかを改めて考える機会になりました。

【写真は三橋ゼミ】

自炊教室(1年生のゼミでの取り組み紹介)

心理臨床学科障害児心理専修1年 中澤桃子(なかざわもこ)
長野県・上田染谷丘高校出身

前原ゼミは、一人暮らしをしている人も多く、偏りがちな食生活を見直すため、また少しでも一人一人の食生活の助けになればという前原先生と生協の方々の思いから、自炊教室を行いました。

食事を作る前にまずは、食事の栄養バランスについて考えてみようとし協の店長さんからのお話がありました。普段のみんなの食事の写真をしたり、前日の食事を振り返ったり、その食事には何が足りないのかを考えることから始めました。一人一人、生活のスタイルもリズムも違い、まだ大学生活も始まったばかりできちんとバランスの取れた食事が出来ている人は少なかったのではないかと思います。

自分の食生活を見直した後に、実際に調理をしました。班ごとに分担して作りましたが、普段あまり自炊していない人にとっても作りやすく、これを機に、自分でも作ってみようと感じた人も多いのではないのでしょうか。これからの生活でも、より食事のバランスを考えて作っていこうと感じた人も多いはず。これまでの自分の食生活を見直し、自分の食生活に対する意識を高めることが出来た自炊教室になりました。



☆クラスメイトのコメント☆

心理臨床学科心理臨床専修1年 角野樹穂(かどのきほ)
愛知県・愛知啓成高校出身

久しぶりに料理をしました。みんなでやっていると楽しくて、あつというまにできてしまいました。分量を間違えたり、お酢を入れなかつたりといういろいろありましたが、自炊教室ができてよかったです。トマトのマリネを初めて食べたけど、とても美味しかったです。ごはんのバランスをみて、もつといろいろとらなきやいけなものがたくさんあるなと少し反省しました。これからいろいろ気をつけようと思います。

子ども発達学科保育専修1年 美浪菜那(みなみなな)
三重県・松阪高校出身

今日の食育自炊教室は思っていたよりも楽しく、みんなで協力して作ったので特においしく感じました。これからは栄養バランスも考えてごはんを作っていきたいと思いました。調理実習は高1以来だったのでみんなで作れることがとても楽しかったです。ゼミの子たちともいっぱい話せてよかったです。また、このような機会があればぜひやりたいです。心もおなかも満たされて満足しました。

子ども発達学科学校教育専修1年 新西竜也(しんざいたつや)
香川県・香川中央高校出身

調理実習は高校1年の時にした以来だったのでとても緊張しましたが、思っていたよりも順調にできたのでよかったです。私は下宿生なので一人で料理もしないといけませんが、最近はバイトも忙しく、コンビニ弁当に頼ることが多かったので、バランスのとれた食事はできていませんでした。しかし、今回の学習で自分でも料理ができると確認したので、これから作っていききたいと思いました。

子ども発達学科学校教育専修1年 川田愛美(かわだあみ)
富山県・南砺福野高校出身

今回この自炊教室を通して、自分の食生活を見なおすことができ、とてもよかったです。バランスのよい食事を心がけていきたいとあらためて思いました。ハンバーグやスープ、ポテトサラダなど、今回のレシピをだいたい覚えることができたので、これからの一人暮らしにいかしていきたいと思います。みんなと協力して一つのことのできて、以前より仲が深まったと思うし、またゼミの中でこのような機会が増えていけばよいと思います。

サークル、課外活動での私たちの取り組みです

もこもこフレンズと申します。

子ども発達学科初等教育専修3年 奥原千純(おくはらちずみ)
長野県・塩尻志学館高校出身

こんにちは。もこもこフレンズは美浜町を中心に子どもに関わるボランティアを行っています。平成25年1月に立ち上がり、現在1年生から3年生10人ほどで活動しています。

数多くのボランティアサークルがありますが、学生が最も多く住んでいる美浜町のボランティアサークルが極めて少ないこと、美浜町の特別支援学級に通っている子どもを持つ親御さんの想いから、ボランティアサークル「もこもこフレンズ」立ち上げへとつながりました。

現在は月に2回、美浜町の支援学級の子ども、家族が集まるふれあい交流会に主に参加しています。地域とつながり、地域で生きることを大切に、美浜町の福祉に目を向ける学生の輪がもっと広まるように子ども達、親御さんと手を取り合っこれからも積極的に活動していきたいと思っています。今年の大学祭では子どもたちと一緒に模擬店を開く予定です。

私達は男子ラクロス部です。

子ども発達学科初等教育専修4年 服部大樹(はつと)
りだいき)三重県・鈴鹿高校出身

現在1年生16人、2年生11人、3年生12人、4年生11人の計50人で活動しています。今年の目標は「東海制覇」と掲げ、全日本選手権に出場するために部員全員で目標に向け日々努力しています。ラクロスは「地上最速格闘球技」と言われるほど熱く激しいスポーツです。私は入学以来4年間続けてきましたが、ラクロスの良さは、夢中になり打ち込めること、努力次第で結果が現れること、運動部、文化部だろうと関係なく誰でもできることだと思います。

私自身も3年生の時に東海選抜に選ばれてアメリカのチームと試合をさせてもらったり、また先輩方の中には日本代表に選ばれた方もいます。ラクロスは大学生活でしかできないスポーツです。私も4年間続け



てきて良かったと実感しています。最後の学生生活で何でもいから真剣に打ち込み、自信を持ってやってきたと思えるものを作ってください。ラクロスに興味を持った方は、大学のホームページやインターネットなどで「ラクロス」と検索してみてください。

わたしたちの学校の教職員を紹介します

通称マエキヨこと、前原清隆先生

子ども発達学部心理臨床学科4年 渡邊恵(わたなべめぐみ)
大阪府・向陽台高校出身

私たちのゼミの先生は通称マエキヨこと、前原清隆先生です。照れ屋でちょっぴりナイーブな前原先生ですが、笑顔がとても可愛くて、ゼミの時間はいつもニコニコしています。こんな笑顔は「日本国憲法」や「法学」などの先生の授業では見たことがありません。(笑) その一方で、ゼミの時間には必ず新聞記事などの資料を印刷して配布してくれるといった、真面目な一面もあります。しかし、ゼミ生が頻りに話を脱線させ、先生もそのまま話に乗っかってしまうので、結局



「で、なんの話してたの?」というオチになってしまうことが多いです。そんな前原先生のことをゼミ生は大好きで、前原先生に文庫を借りたり、一緒にお酒を飲んだりすることもあります。ビールが大好きな先生とビールが大好きなゼミ生はワイワイガヤガヤしながら、本当に楽しいひと時を過ごすことができます。これからも前原先生のキラキラした頭と笑顔が見られるようにゼミ生一同で卒論や再履修科目等をしつかりとこなしていきたいと思っています。☆

New Face

赤松伸一 子ども発達学部事務長

2013年の5月から子ども発達学部の事務長になりました赤松です。4月までは、同じ学事課で社会福祉学部担当と履修業務全般を担当していました。1年の時の試験オリヤや特欠届の受け渡しで、顔を見たことがある学生さんも多いのではないかと思います。

さて、2008年にスタートした子ども発達学部は、今年度から2学科4専修になり新たなスタートを切りました。新旧全ての専修に共通していることは、子どもへの理解を深め、子どもへの支援方法を学び、子どもへの貢献を通して社会の「ふくし」づくりに貢献していくことです。大学生は大人と子どもの狭間にあるとよくいわれます。だからこそ、社会に出た教職員には見えない「子ども」のことが見えるのではないのでしょうか。大学の学びを通過点として捉えるのではなく、今だからこそできることがある時期と捉え、積極的に学んでください。教員と職員が全力で皆さんをバックアップしていきます。

右の似顔絵は、赤松さんの長女(4歳)が描いたものです。あごのひげとか、特徴をとらえ、よく描けていますね。

